

第3節 石器（第11図～12図、第5表）

「余山」の注記が施される個体は、現在のところ35点を数える。ただし、下郷コレクションにおける石器資料の悉皆調査が完了しておらず、登録台帳で記載情報を確認できたものからリスト化したため、登録上は別の遺跡とされている資料群のなかにも「余山」の注記をもつ個体が含まれている可能性が残される。ひとまず本報告では、上記の作業経過によって確認できた個体についてまとめておきたい。なお、すでに『千葉県の歴史』[千葉県史料研究財団2004、以下『県史』と略記]でも当コレクション中の石器が報じられており、今回新たに図化したものはそれらとの重複を極力避けるようつとめた。したがって、『県史』を併読されることをお願いしたい。

1. 砥石（第11図-1～第12図-5）

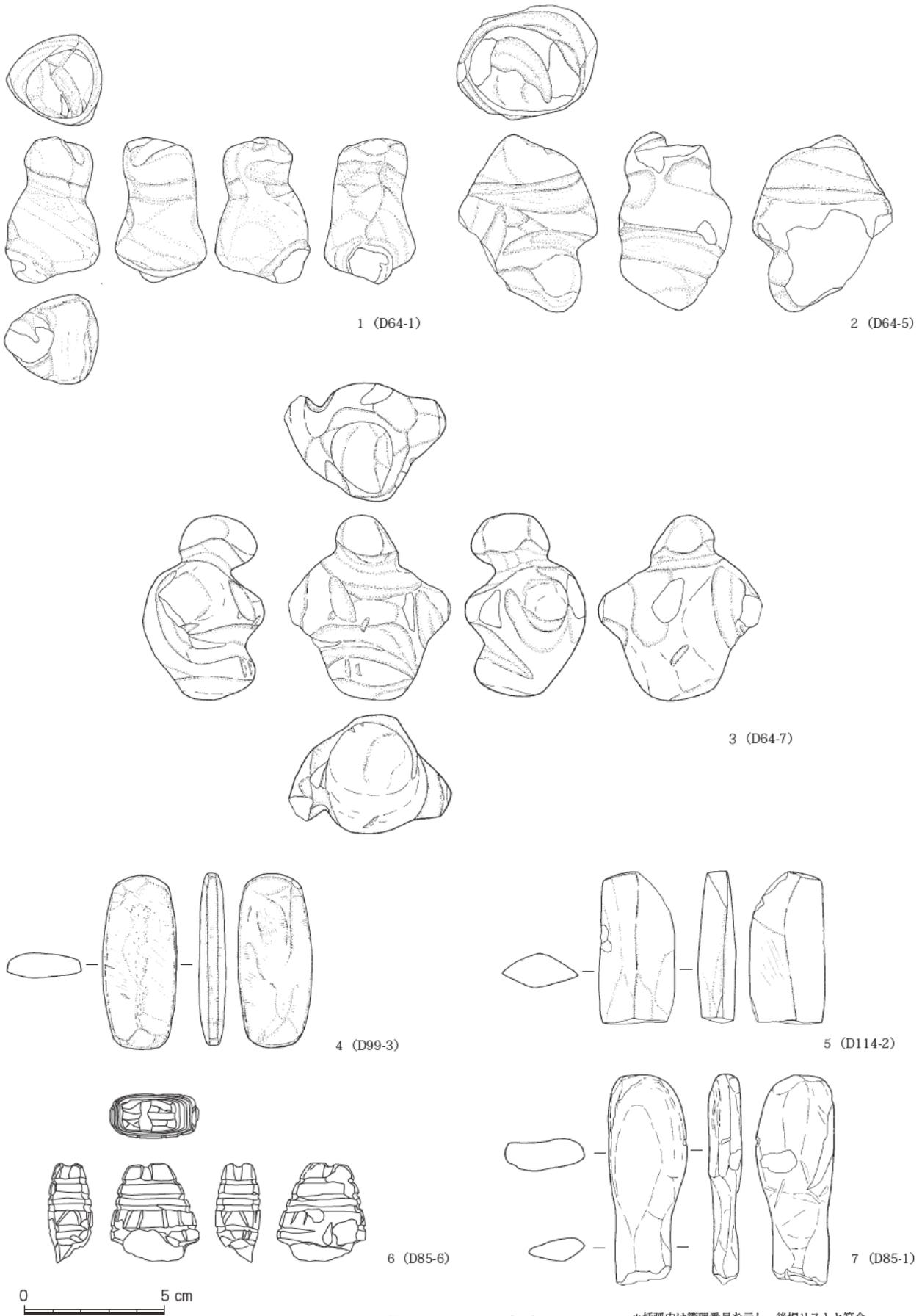
14点確認され、そのうち管理番号D64-1～11は貝輪製作用とみられる（第5表）。かつて『県史』でD64-2（『県史』図1-4）・D64-3（同1）・D64-9（同2）・D64-10（同3）が図化されている[千葉県史料研究財団2004；p.1255]。

下郷コレクションに含まれる貝輪製作用砥石は大きく二つのタイプに選別できる。まずひとつは筋状の砥面を側面に複数もつ小型のもので、『県史』で図化されたD64-3のほか、D64-4およびD64-11が存在する。形態も平坦面を有するといった共通性が指摘できる。もうひとつは、器面を周回するような、やや幅広の砥面をもつもので、サイズは前者に比べてやや大きい。D64-7（第11図-3）やD64-2（『県史』図1-4）のように、突起化した部分を有する個体もある。これらはいずれも貝輪の内径拡張に繰り返し使用されたために突起状に変形したと考えられるが、同一個体上には殻表面の研磨に用いられたと考えられる幅広の砥面も有することから、一個体でいくつかの機能性を帯びていたとみるべきであろう。また、D64-5（第11図-2）とD64-7（第11図-3）を見比べたとき、砥面の位置や形成方向などが類似することも興味深い。砂岩の材質はD64-7がやや細密な印象をもつ以外に顕著な相違を見いだせなかった。ただし前述した小型の一群においてははやや堅緻であるといえるかもしれない。

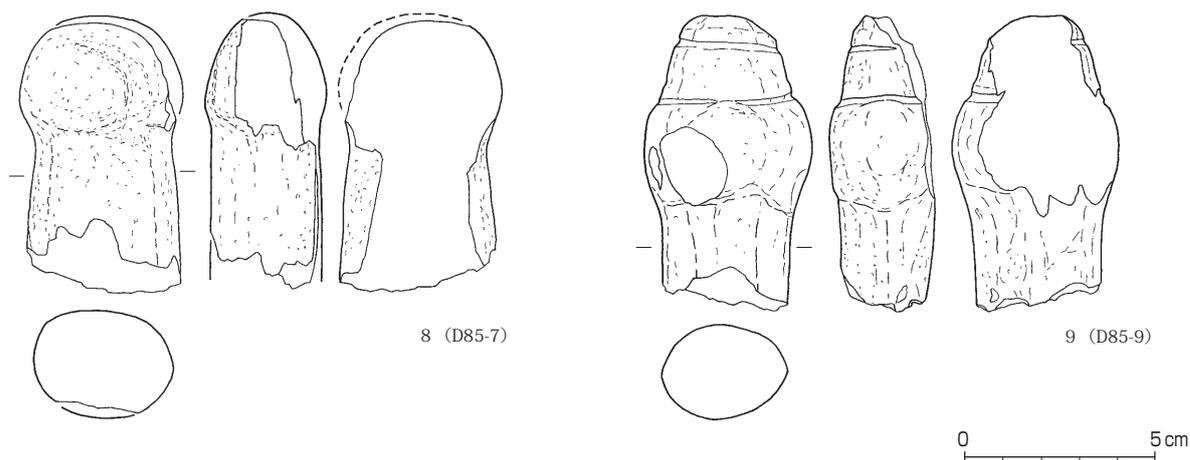
貝輪製作用と考えられるもの以外に、小判型（D99-3、第11図-4）・ナイフ型（D114-2、第11図-5）などの平面的な砂岩製石器が存在する。D99-3は完形で、よく見ると両面に非常に細かな擦痕がかろうじて観察でき、使用痕とみなした。またD114-2は短辺の一端を折損するが、反対の短辺は砥面として使用された痕跡が確認できる。断面が菱形を呈することから石剣の可能性も考慮されたが、砂岩製であることや砥面が残ることから、前者も含めてひとまず砥石に含めることとした。この2点はいずれも粒子が細かいという共通性をもつ。なお、こうした平面的な砥石については骨角器加工用と想定されているようである[大工原2004；p.407]が、特定部位における擦痕の集中などは観察できなかった。

2. 石斧

石斧は7点確認できた。そのうちの5点が『県史』で図化されている[財団法人千葉県史料研究財団2004；p.1272]。小型の磨製石斧が多く、完形に近い個体（D99-2）もあるが、やはり全長が68mmと小型品である。そのほか軟玉を用いた石斧（玉斧）なども含まれている。



第11図 石器(1)



第12図 石器(2)

第5表 石器

(単位: mm)

管理番号	枝番号	注記 遺跡名	器種・形式	石材	長さ	幅	厚さ	備考
D38	3	余山	磨製石斧	ハンレイ岩	(60)	(47)	(30)	基部
D63	1	余山	敲石(石製円盤)	砂岩	(55)	(53)	(11)	
D63	2	余山	敲石(石製円盤)	砂岩	(45)	(45)	(14)	
D63	3	余山	敲石(石製円盤)	粘板岩	(53)	(55)	(14)	
D64	1	余山	砥石	砂岩	(53)	(34)	(43)	貝輪製作用
D64	2	余山	砥石	砂岩	(63)	(44)	(34)	貝輪製作用
D64	3	余山	砥石	砂岩	(37)	(33)	(21)	貝輪製作用
D64	4	余山	砥石	砂岩	(36)	(33)	(28)	貝輪製作用
D64	5	余山	砥石	砂岩	(64)	(40)	(41)	貝輪製作用
D64	6	余山	砥石	砂岩	(71)	(43)	(23)	貝輪製作用
D64	7	余山	砥石	砂岩	(66)	(58)	(43)	貝輪製作用
D64	8	余山	砥石	砂岩	(67)	(59)	(33)	貝輪製作用
D64	9	余山	砥石	砂岩	(50)	(46)	(33)	貝輪製作用
D64	10	余山	砥石	砂岩	(76)	(50)	(29)	貝輪製作用
D64	11	余山	砥石	砂岩	(44)	(39)	(28)	貝輪製作用
D77		余山	凹石	砂岩	(76)	(78)	(39)	両面中央に1箇所ずつの凹部
D85	1	余山	石棒頭部	緑泥片岩	(76)	(28)	(12)	石刀に近い
D85	6	余山	石棒頭部	粘板岩	(36)	(32)	(16)	装飾付
D85	7	余山	石棒頭部	緑泥片岩	(71)	(36)	(27)	
D85	9	余山	石棒頭部	緑泥片岩	(77)	(44)	(28)	赤化
D86	11	余山	石棒端部	粘板岩	(60)	(26)	(21)	
D99	1	余山	磨製石斧	硬砂岩	(85)	(54)	29	
D99	2	余山	磨製石斧	ハンレイ岩	68	40	(22)	ほぼ完形
D99	3	余山	砥石	砂岩	(63)	(27)	(9)	
D114	1	余山	砥石か	砂岩	(53)	(36)	(25)	石斧基部と同形態
D114	2	余山	砥石	砂岩	(54)	(26)	(14)	
D114	3	余山	不明	-	(113)	(40)	(24)	サンゴ化石
D114	4	余山	石棒端部	粘板岩	(70)	(21)		
D114	5	余山	磨製石斧	硬砂岩	(95)	(48)		
D114	6	余山	磨製石斧	安山岩	(55)	(38)	(20)	
D114	7	余山	磨製石斧	硬砂岩	(41)	(38)	(25)	
D114	8	余山	磨製石斧(玉斧)	軟玉	(34)	(36)	(21)	
D114	9	余山	石刀か	粘板岩	(60)	(44)	(9)	頭部か
D118		余山	磨り石	砂岩	(65)	(61)	(35)	
D145	2	余山	砥石兼凹石	砂岩	(103)	(83)	(43)	片面に大きな砥面、反対面に2箇所の凹部

* () は現存最大値を示す

3. 石棒

頭部破片6点が確認できた。採集品の場合によくあることで、特徴的な形状や部位として認識しやすかったのだろう。D85-6(第11図-6)は沈線加工を施した装飾付頭部だが、その破損した断面形から、石刀に近い形態に変化したものとみなせる。またD85-1(同7)も同じく石刀の可能性が高いが、縄文時代に属するものかどうか検討の余地が残る。

下郷コレクションの石器は砥石・石斧・石棒など、比較的認識しやすいものが多い。反面、近年の発掘調査で見ついている、貝輪殻頂部を穿孔するために用いられた縦長の敲打用石器〔石橋2000; p.842〕などは確認できなかった。当時の採集者たちがこれらの石器を認識できなかったことを示しているのかもしれない。(加藤俊吾)

【参考文献】

- 石橋宏克 2000 「余山貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1 (旧石器・縄文時代)』財団法人千葉県史料研究財団；pp.836-843
- 財団法人千葉県史料研究財団 2004 『千葉県の歴史 資料編 考古4 (遺跡・遺構・遺物)』財団法人千葉県史料研究財団
- 大工原豊 2004 「(6)生活用の石器」『千葉県の歴史 資料編 考古4 (遺跡・遺構・遺物)』財団法人千葉県史料研究財団；p.407